

## A. R. スタン・マンズールに関する覚え書き

### — 第6代ムハマディヤ中央本部委員長の足跡 —

利 光 正 文

#### はじめに

1995年の7月と8月の2ヵ月間インドネシアを訪問し、イスラム改革団体ムハマディヤに関する文献史料を収集した。今回は主として西スマトラに滞在し、ミナンカバウ(西スマトラの別名)のムハマディヤ関連史料を集めて回った。

とりわけ、A. R. スタン・マンズールに的を絞り、彼に関する情報や文献史料を努めて入手した。なぜなら、スタン・マンズールはミナンカバウのムハマディヤ運動の発展に多大な功績を残すとともに、ムハマディヤ運動そのものの歴史に



A. R. スタン・マンズール

においても傑出した指導者の一人であったからである。

参考までに、歴代のムハマディヤ中央本部委員長を次に示す。

1. K. H. アフマド・ダフラン (1912~1923)
2. K. H. イブラヒム (1923~1934)
3. K. H. ヒシャム (1934~1937)
4. K. H. マス・マンズール (1937~1944)
5. Ki・バグス・ハディクスモ (1944~1953)
6. A. R. スタン・マンズール (1953~1959)
7. H. M. ユヌス・アニス (1959~1962)
8. K. H. アフマド・バダウィ (1962~1968)

9. A. R. ファフルディン (1971~1990)

10. アズハル・バシル (1990~1993)

11. アミン・ライス (1995~ )

この内、1968~1971年及び1993~1995年の間は委員長死去のため、A. R. ファフルディンとアミン・ライスがそれぞれ委員長代行を務めている。上記11名の中央本部委員長の中で、A. R. スタン・マンズールのみがスマトラ出身で、あとは皆ジャワ人である。スタン・マンズールの中央本部委員長就任は、ムハマディヤの歴史において、謂わば例外的な事柄に入るわけである。何ゆえにスタン・マンズールは委員長となりえたのか。筆者には今まで、この点が理解できなかった。今回の旅で、そのことの回答が得られたので後述する。

ところで、スタン・マンズールに関する本格的な研究はまだない。創立期より、ムハマディヤの出版活動は大変盛んであったけれども、改革運動の内容や活動目標・活動状況をアピールするための出版物が中心を占め、ムハマディヤの歴史や指導者に関するものは殆どとっていいほどなかった。しかし、近年、中央本部によるムハマディヤの歴史<sup>(1)</sup>や著名なリーダー達の伝記<sup>(2)</sup>が出版されるようになった。けれども、スタン・マンズールについての出版物はない。彼に関する研究はムハマディヤ運動を解明する上で是非とも必要であるし、インドネシアのイスラム改革運動史を考察する場合にも避けて通れない。スタン・マンズールに関する本格的な研究が待たれる所以である。

冒頭で断っておくが、小稿は A. R. スタン・マンズールに関する実証的な研究ではない。スタン・マンズールの周辺を探る基礎的な作業である。しかし、こうした作業を積み重ねることにより、やがてはその全体像に到達しうるものと確信する。ともあれ、スタン・マンズールの生い立ちから、先ず述べたい。

### 1. スタン・マンズールの出自

A. R. スタン・マンズール (Soetan Mansoer) は、1895年ミナンカバウのマニンジャウで生まれた。きれいで大きなマニンジャウ湖はマニンジャウの象徴で、彼は湖のほとりのスンガイ・バタン村の出身である。スタン・マンズール自身が残したメモワール<sup>(3)</sup>によると、1902～1909年にかけてマニンジャウの官立学校を卒業し、1910年パダン・パンジャンの H. アブドゥル・カリム・アムラが主宰するプサントレン (イスラム塾)・イニクに入り、1917年までそこでイスラムの勉強を続けた。アブドゥル・カリム・アムラは別名をハジ・ラスルといい、同じくマニンジャウ出身であった。彼は聖地メッカで長く勉強、帰国後ミナンカバウで有名になっていた。ハジ・ラスルはスタン・マンズールの非凡さを見抜き、自分の娘を彼に嫁がせた。1921年スタン・マンズールはミナンカバウの伝統ムランタウ (出稼ぎする) に従い、妻と幼い息子を連れて中部ジャワのプカロンガンに移り住んだ。<sup>(4)</sup> ハジ・ラスルの息子はハムカ (故人)、孫はロシディ・ハムカで、両者はムハマディヤのリーダーとして高名である。彼らは、まさにムハマディヤ・ファミリーと言えよう。

スタン・マンズールは生涯ハジ・ラスルの弟子であったが、なかでも師の薫陶を最も受けたのは、イスラム改革主義についての思想であった。一生を通じて、スタン・マンズールは外国

で学んだことはなかったけれども、師を通してイスラム改革主義に精通していった。プカロンガンは当時ミナンカバウ人の居住区が成立していたが、スタン・マンズールはイスラム改革主義の組織“ヌルル・イスラム (イスラムの光)”を彼らの間に作った。そして、この組織を母体として、ムハマディヤの支部がこの地に成立する。その経過については、すでに拙稿で明らかにしている<sup>(5)</sup>ので、ここではふれない。ただ、スタン・マンズールがムハマディヤの創立者 K. H. アフマド・ダフランの人格に傾倒し、その理念と活動方針に強い共感を覚えたであろうことは容易に想像がつく。スタン・マンズールの義理の父ハジ・ラスルは、ムハマディヤ西スマトラ支部の成立に尽力するが入会せず、イスラム教育の改革を志向する団体“スマトラ・タワリブ”<sup>(6)</sup>で活躍する。一方、義理の兄弟ハムカはムハマディヤ会員となり、ミナンカバウでの運動を担って行く。1920年代、ムハマディヤがミナンカバウに進出を果たしたことは、以後の運動の高揚に決定的な意味を持つ。「ムランタウ」の伝統を持ち、インドネシア各地に散在するミナンカバウ人、彼らの情報ネットワークに乗り、ムハマディヤの理念があちこちに伝えられることとなった。イスラム改革運動ではミナンカバウの方がジャワよりも先行し、「カウム・ムダ (若い世代)」運動<sup>(7)</sup>の豊富な経験を有している。このミナンカバウにムハマディヤが橋頭堡を築いたことは、ムハマディヤ運動が全国的規模で展開するための第一段階であった。そして、ミナンカバウ人のうちでも、スタン・マンズールが最もアクティブなムハマディヤ・リーダーとして頭角を表わして行く。

## 2. コンスル・ムハマディヤ（ムハマディヤ全権代理）としての時代

今回の旅で出会ったうちの一人に、ザイム・ライス氏がいる。彼はカナダのモントリオールにあるマクギル大学に留学した新進気鋭の研究者で、現在、パダンの I A I N (Institute Agama Islam Negeri 国立イスラム大学) で教鞭を執っており、イスラム運動についての一家言を持つ。マクギル大学に提出した氏の修士論文<sup>9)</sup>は出色で、スタン・マンスールの研究には欠かせない。

さて、プカロンガンのムハマディヤ支部設立に貢献したスタン・マンスールは、中央本部から派遣され、郷里ミナンカバウでのムハマディヤ運動の基盤確立に奔走する。具体的には、1925年マニンジャウにスンガイバタン・タンジュンサニ支部が成立(正式には1926年1月)、翌26年6月2日パダン・パンジャン支部がそれに続いた。スタン・マンスールは1926年に派遣され、主としてパダン・パンジャンで活動を始めた。パダン・パンジャンは商業の盛んな町で、スマトラ西北端のアチェと並び聖地メッカに最も近い所として‘スランビ・メッカ(メッカのベランダ)’と呼ばれている。当然、イスラムに敬虔な人が多く、カウム・ムダ運動の中心地の一つでもあった。この地は学問の中心でもあり、改革派の教育組織が創立された。1920年男子のための教育機関“スマトラ・タワリブ”が、1923年女子教育の機関“ディニヤ・プトゥリ”がそれぞれ産声を上げている。<sup>9)</sup>ただ、パダン・パンジャンにはムハマディヤが来る少し前に共産主義運動が影響を及ぼしており、両者のせめぎあいが繰り返される。共産主義はスマトラ・タワリブにその支持者を見いだす。

では、その後のスタン・マンスールの行動を見てみよう。パダン・パンジャン支部の成立は

上述の如く1926年6月2日のことである。支部設立後のリーダーは、次のようである。

1. S. Y. スタン・マンクト (1926~1930)  
……支部委員長
2. A. R. スタン・マンスール (1930~1941)  
……西スマトラ地区コンスル
3. S. Y. スタン・マンクト (1941~1945)  
……西スマトラ地区コンスル
4. ハムカ (1945~1950)  
……西スマトラ地区コンスル
5. S. Y. スタン・マンクト (1950~1954)  
……西スマトラ地区コンスル
6. H. A. マリク・アフマッド (1954~1958)  
……西スマトラ地区コンスル

この内、スタン・マンクトは三度登場している。彼はミナンカバウの初期ムハマディヤ運動において重要な役割を果たしているけれども、その素顔はあまり知られていない。<sup>10)</sup> スタン・マンスールの陰に隠れてあまり目立たないので、彼についてはこれからの研究に待たざるをえない。それに比べると、ハムカやマリク・アフマッドは大変有名である。スタン・マンスールと同様、彼らも中央本部の役員となって活躍したためであろう。そして、この三者は姻戚関係にある。マリク・アフマッドの息子はスタン・マンスールの娘と結婚しており、非常に近い関係となっている。マリク・アフマッドはムハマディヤが創立された1912年にパダン・パンジャンで生まれ、スマトラ・タワリブを修了後引き続き同地の“クリヤトゥル・ムバリギン(伝導の講義)”で学んだ。その折スタン・マンスールと知り合い、弟子となった。1933年にムハマディヤに入会、ミナンカバウでのスタン・マンスールの後継者となった。1974年からムハマディヤ中央本部委員となり、1978年の第40回ムハマディヤ・スラバヤ大会の折には中央委員の選挙に

において最高の得票数を得たが、中央本部委員長の地位を A. R. ファフルディンに譲っている。1982年から中央本部顧問を務め、1993年に死去した。彼の一生はスタン・マンスールのそれとダブって見える。スタン・マンスールに深く関わった人物として、マンスール研究には欠かせない一人である。

実のところ、スタン・マンスールがコンスルに就任する1930年は、ミナンカバウのムハマディヤ運動にとって重要な年である。なぜなら、第19回ムハマディヤ全国大会がミナンカバウで開かれたからである。この大会はブキティンギで開催されたけれども、なにしろジャワ以外の地では初めてであり、ムハマディヤの拡大を占う試金石でもあったからである。ブキティンギ大会において、コンスル制が導入された。前年の第18回ソロ大会において、19の「ダエラ（地域）」が区分けされていた。各ダエラを次に示す。

1. ジョクジャカルタ
2. ソロ
3. スマラン
4. マディウン
5. スラバヤ
6. パスルアン
7. ブスキ
8. マドゥラ
9. プカロンガン
10. バニユマス
11. プリアンガン
12. ジャカルタ
13. ランプン・パレンバン
14. プンクル
15. ミナンカバウ
16. パシシル・ティムール
17. アチェ
18. セレベス
19. 南ボルネオ

そして翌年のブキティンギ大会において、それぞれのダエラのコンスルが確定した。ミナンカバウのコンスルには、前述のように A. R. スタン・マンスールが選出された。<sup>(11)</sup> ムハマディヤの場合、役員は全て会員による選挙となっているけれども、スタン・マンスールのコンスル就任は、中央本部の強い意志が働いたと見るべきであろう。こうして、ミナンカバウでは10年強

に亘るスタン・マンスールの時代が始まった。尚、スマトラ西北端のアチェでもミナンカバウとほぼ同時期にムハマディヤの支部が成立しており、成立にあたりスタン・マンスールが大きく関わっている。ただ、アチェではイスラム伝統派の力が強く、ムハマディヤの勢力は容易に拡大出来ず、苦戦を強いられる<sup>(12)</sup>アチェに比べると、ミナンカバウでのムハマディヤの発展は、驚異的ですからある。

1926年にパダン・パンジャン支部が設立されて後、1930年までにシマプル、ブキティンギ、パヤクンプ、パリアマン、パダンと相次いで支部が誕生した。<sup>(13)</sup> 特に、パダンはミナンカバウの中心都市であり、ムハマディヤのダエラの拠点市となって行く。しかし、当時はブキティンギのほうが知名度が高く、第19回ムハマディヤ大会はここで開かれた。この大会は、ムハマディヤの組織作りの上でも、重要な意味を持っていた。というのは、前述の如く、ダエラごとのコンスルの設置に加え、下部組織としての各部局が形を整えたからである。それぞれの部局は、次のようになっていた。

1. マジュリス・タルジ (宗教問題会議)
2. マジュリス・ヒクマ (知恵の会議)
3. マジュリス・アイシヤ (アイシヤ会議)
4. マジュリス・プムダ (青年会議)
5. マジュリス・ヒズブル・ワタン (ヒズブル・ワタン会議)
6. マジュリス・プンガジャラン ダン プンディディカン (教授・教育会議)
7. マジュリス・タマン・プスタカ (図書館会議)
8. マジュリス・タブリグ (布教会議)
9. マジュリス・P. K. U. (社会福祉会議)
10. マジュリス・エコノミ (経済会議)
11. マジュリス・ワカフ ダン クハルタブ

中央委員の経験者や各地域で高名な人々が、その対象となる。大会の当日、約3,000名の参加者がリストアップされた中から13名をそれぞれ連記する。従って、集計には長時間を要する。得票数の上位13人が中央委員となるわけだが、最高得票者が委員長となるかという点、そうとも限らない。各委員の話し合いで、委員長が決められる。ただし、得票数の多い者が委員長となるケースが殆どではある。

ところで、スタン・マンスールの場合、上記のプロセスを経ずに委員長に選出されており、唯一の例外となった。スタン・マンスールが中央本部委員長となったのは、1953年中部ジャワのプルウォケルトで開かれた第32回全国大会においてであった。その前年5月、ジョクジャカルタの中央本部で開催されたシダン・タンウィルにおいて、彼はスマトラ全権代表 (Wakil mutlaq Sumatera) となっている。<sup>(17)</sup> プルウォケルト大会での中央本部役員の選挙結果は以下の通りであった。(右側の数字は得票数)

- |                      |        |
|----------------------|--------|
| 1. H. M. ユヌス・アニス     | 10,945 |
| 2. H. M. ファリード・マルフ   | 10,812 |
| 3. ハムカ               | 10,011 |
| 4. K. H. A. バダウイ     | 9,900  |
| 5. K. H. ファキ・ウスマン    | 9,057  |
| 6. Mr. カスマン・シンゴディメジョ | 8,568  |
| 7. Dr. シャムスッディン      | 6,654  |
| 8. A. カハル・ムザキル       | 5,798  |
| 9. Mh. ムリアディ・ジョヨマルトノ | 5,038  |

しかしながら、実際に中央本部役員に就任したのは、次のような顔ぶれとなった。

- |        |                   |
|--------|-------------------|
| 委員長    | A. R. スタン・マンスール   |
| 第一副委員長 | K. H. ファキ・ウスマン    |
| 第二     | 〃 H. M. ファリード・マルフ |

- |        |                        |
|--------|------------------------|
| 第三副委員長 | H. A. バダウイ             |
| 書記長    | H. M. ユヌス・アニス          |
| 書記     | ジンダル・タミミ               |
| 会計     | M. S. B. ウィジョカルトノ      |
| 委員     | ハムカ                    |
| 〃      | Mr. カスマン・シンゴディメジョ      |
| 〃      | Dr. シャムスッディン           |
| 〃      | A. カハル・ムザキル            |
| 〃      | Mh. ムリアディ・ジョヨマルトノ      |
| 〃      | H. ハシム <sup>(18)</sup> |

役員の中には、上の選挙結果欄に名前が出ていない人物もいるが、恐らく、掲載されている人々よりも下の得票数で、省略されたものと思われる。スタン・マンスールについては、次のようなエピソードがある。彼はシダン・タンウィルでは、中央本部役員候補に選ばれていない。従って、当然、大会でも投票の対象ではありえない。選挙後、高得票の役員13人が委員長のことで話し合っていた時、「スタン・マンスールがいるじゃないか。彼こそ委員長に最もふさわしい。」と誰かが言い出した。「そうだ、そうだ、我々は彼のことを忘れていた。」後は、全員一致のラブコールとなった。こうして、スタン・マンスールは第6代の中央本部委員長に推戴されたわけである。この話は、スタン・マンスールの娘婿ルシュディ・マリク氏からうかがった。スタン・マンスールは1956年スマトラのパレンバンで開かれた第33回大会でも委員長に再選されている。そして、次のジョクジャカルタ大会でユヌス・アニスにバトンタッチするまでの6年間、彼は中央本部委員長を務めた。

#### おわりに

ムハマディヤ中央本部の委員長を退いて後、

スタン・マンズールはジャカルタに居を移し晩年を過ごした。1985年90歳でこの世を去るまで中央本部の顧問を務め、さまざまなアドヴァイスを与え続けた。特に、ムハマディヤに対し、現スハルト政権がインドネシアの建国五原則（パンチャ・シラ）をアサス・トゥンガル（唯一の根本原則）とするように申し入れがあった時、スタン、マンズールは激しく抵抗、反骨ぶりを示した。もともと、ムハマディヤのアサス・トゥンガルは、当然のことながらイスラムであった。しかし、当時のムハマディヤ中央本部は1985年スラカルタで開催された第41回大会においてパンチャ・シラを受け入れ、スタン・マンズールの忠告を聞かなかった。それは、彼の死の直後のことである。ただ、その時の政治・社会情勢を鑑みた場合、中央本部の選択はやむを得なかったとも言える。

ところで、今回のインドネシア滞在中、ジャカルタのスタン・マンズールの家族を訪問した。ジャカルタのメインストリート、タムリン通りにある有名なホテル・インドネシアから徒歩で10分ほどのK. H. マス・マンズール通りのガン・ロンタル・アタスに家はある。スタン・マンズール夫人のファティマさんはまだ存命であった。94歳と高齢ながら記憶力はいささかも衰えておらず、息子のシャキル氏とともに筆者を歓迎してくれた。夫人とシャキル氏は多くのスタン・マンズールに関する情報提供を厭わなかった。親切なお二人に、記して謝意を表わしたい。

最後に、コンスルや中央本部委員長としてのスタン・マンズールの事績についての実証的研究及び彼の思想についての解明は、不十分なままである。冒頭で断ったように、小稿はスタン・マンズール研究の基礎的作業であるので、解明できなかった点については、将来の課題とした

い。

註

- (1) Sejarah Muhammadiyah, Majelis Pustaka Pimpinan Pusat Muhammadiyah, 1995. ただし、この本は、1924～1944年までの期間は欠落している。ムハマディヤ運動史にとって、この間は最も重要である。
- (2) ジョクジャカルタの中央本部出版局より次の7名の伝記が出されている。
  1. K. H. A. Dahlan
  2. K. H. Abdurrahman
  3. Njai A. Dahlan
  4. H. Fachroddin
  5. H. M. Anis
  6. K. H. A. Dardiri
  7. K. H. A. Badawi
- (3) A. R. Sutan Mansur, Keterangan Riwayat Hidup, Jakarta, 1980.
- (4) HAMKA, Islam dan Adat Minangkabau, P. T. Pustaka Panjimas, Jakarta, 1984, p. 195.
- (5) 拙稿「中部ジャワ北岸のムハマディヤ運動」『史学研究』203号, 1993年, を参照されたい。
- (6) この団体については, Dr. Burhanuddin Daya, Gerakan Pembaharuan Pemikiran Islam : Kasus Sumatera Thawalib, P. T. Tiara Wacana Yogya, 1990. に詳しい。
- (7) この運動の出発点は、バドリ運動である。バドリ運動については、既にいくつかの研究書が出されているが、省略する。
- (8) Za'im Rais, The Minangkabau Traditionalists' Response To The Modernist Movement, Institute of Islamic Studies, Mcgill University, 1994.

- (9) この教育機関については, Hijjah Rahmah El Yunusiyah dan Zainuddin Labay El Yunusy, Pengurus Perguruan Diniyyah Puteri Padang Panjang, Perwakilan Ja-karta, 1991. に詳しい。
- (10) 彼の書いた唯一のものは, S. Soetan Mangtocto, Pedoman Moehammadiyah, Ts. Ichwan Boekit Tinggi, 1935.
- (11) Solichin Salam, Muhammadiyah dan Kebangunan Islam di Indonesia, N. V. Mega Djakarta, 1965, pp. 65—66.
- (12) 拙稿「植民地期アチェのムハムディヤ運動」『東南アジア—歴史と文化—』No24, 1995. を参照されたい。
- (13) Dr. HAMKA, Muhammadiyah di Minangkabau, Yayasan Nurul Islam, Jakarta, 1974, p. 36.
- (14) Solichin Salam, op. cit., pp. 66—67.
- (15) Soeara Moehammadiyah, Hoofdbestuur Moehammadiyah di Djokjakarta, Mei 1937, pp. 33—34.
- (16) Almanak Moehammadiyah, Hoofdbestuur Moehammadiyah di Djokjakarta, 1939—1940, pp. 224—225.
- (17) Suara Muhammadiyah, Pengurus Besar Muhammadiyah, Jogjakarta, Juni 1952, p. 272.
- (18) Buah Keputusan Mu'tamar Muham-madiyah Ke 32 di Purwokerto, Pusat Pimpinan Muhammadiyah, Jogjakarta, pp. 6—7.